

アメリカ的医療倫理を 日本でどのように発展させるか

北野喜良

IRYO Vol. 63 No. 4 (242-247) 2009

要 旨

近年、日本の医療における医療倫理観は変革を遂げている。1980年代の後半より、医療の現場でインフォームド・コンセントが取り入れられ、患者自身の意思決定に基づいて検査あるいは治療の選択が行われるようになってきた。インフォームド・コンセントは、オートノミー（自律）尊重という倫理原則に基づいて成り立っているが、それは日本で育ったものではなく、欧米とくにアメリカの医療倫理的考え方を取り入れたものである。アメリカとは社会的・文化的に異なる日本の医療にアメリカ的医療倫理をどのように取り入れたらよいのであろうか？

本稿では、オートノミー尊重の倫理原則についてもう一度見つけ、日本の医療にすでに深く浸透しつつある現状についてふれ、病名告知における日本とアメリカの違いを解析する。さらに、「病気は誰のものか」という本質的な問題に目を向け、医師—患者—家族関係について日本とアメリカの相違を考える。こうした論議を踏まえて「日本でアメリカ的医療倫理をどのように発展可能か」という問いに迫る。

キーワード 医療倫理, インフォームド・コンセント, オートノミー尊重, 告知

はじめに

日本において定着しつつある医療倫理は欧米、とくにアメリカの影響が強い。アメリカでも1960年代には、医師は一般的に患者に告知をせず、患者もそれを求めなかった。しかし、第二次世界大戦における人体実験への反省と公民権運動による社会文化的変革とあいまっての台頭、臨床医学の目覚ましい発展を遂げ、1970年代に医療倫理においても大きな変革がなされた¹⁾。それまでの倫理原則である善行 (beneficence)、無危害 (nonmaleficence)、正義

(justice)に加えて、オートノミー（自立）尊重 (respect for autonomy) の倫理原則が重要視されるようになり、このオートノミー尊重に基づいたインフォームド・コンセント (informed consent) が医療現場で行われるようになった。守秘義務、情報開示あるいは告知 (truth telling) もこのオートノミー尊重の倫理原則に基づいて普及している。日本においてもアメリカの医療倫理的考え方が取り入れられ、1980年代の後半より医療現場で用いられるようになった。現在では医学教育でも教えられ、医療における基本的な理念となっている。医療界のさまざま

まつもと医療センター

別刷請求先：北野喜良 まつもと医療センター 副院長 〒399-8701 長野県松本市芳川村井町1209番地
(平成20年9月2日受付, 平成20年12月16日受理)

What Should Be Done to Develop American Medical Ethics in Japan?

Kiyoshi Kitano, NHO Matsumoto Medical Center

Key Words: medical ethics, informed consent, respect for autonomy, truth telling